

慶暦後期の梅堯臣詩について

大井 さき

はじめに

梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）の詩を制作年に従って見ていくと、詩から受ける印象がその前後とは少し異なる期間があることに気がつく。それはだいたい仁宗の慶暦年間（一〇四一—一〇四八）の後半にあたる。本稿では範圍を慶暦四（一〇四四）年から慶暦八（一〇四八）年まで、梅堯臣の年齢で言えば四十三歳から四十七歳までの五年間に定め、「慶暦後期」と呼ぶことにする。

この時期の詩で目につくのは、夜中に騒ぐネズミや、シラミ取りの場面など、唐代まで詩の主題とされることのほとんどなかった事物を詠じたものである。そのうち、「虫」を主題とする詩に注目すると、慶暦後期とその他の時期との差が浮かび上がってくる。

慶暦三（一〇四三）年以前……「聚蚊」「舟中聞蛩」（一〇三四）、「秋日詠蟬」（一〇三七）、「詠蜘蛛」（一〇四〇）
慶暦四（一〇四四）年……「觀居寧畫草蟲」「蜂」

ハチ（蜂）をうたう詩も慶暦後期にのみ見られるが（「蜂」「蜜」「十月菊上蜂」）、唐代までの詩においてハチが主題となる頻度は、セミやコオロギほど高くない。このように、虫に注目した限りでは、従来の詩にあまり詠じられてこなかったものが慶暦後期に集中してうたわれていると言えるのである。

また、慶暦後期とその前後の時期には、それぞれ一貫ずつか（蚊）を詠じた詩がある。景祐元（一〇三四）年すなわち慶暦後期より前の時期の作である「聚蚊」は、蚊及び他数種の虫を用いて人間社会を描き出した、寓意の詩である。一方、慶暦六年の「二月雨後有蚊蚋」詩は、蚊のいる実際の風景を写しとって自身の感慨を述べたもので、前者とは大きく印象が異なる。慶暦より後の時期の作「蚊」は、船旅中の徒然に作ったとされる一群の詠物詩の内一首で、こちらも「二月雨後有蚊蚋」詩とはまた違った蚊の取りあげ方である。このように、同じく蚊を描くにしても、詩中で蚊が担う役割には慶暦後期とその前後の期間との間に少々差があるように思う。

それでは、虫をうたう詩以外についても、慶暦後期が梅堯臣の詩作活動において特徴的な時期であると言えるのだろうか。本稿では、慶暦後期とそれ以前の詩を比較することにより、両時期の間で本当に詩に変化が生じていると言えるのか、言えるのであれば具体的にどのような点が変ったのかを明らかにしたい。

慶暦五（一〇四五）年……「師厚云蟲古未有詩邀予賦之」

「蚯蚓」

慶暦六（一〇四六）年……「二月雨後有蚊蚋」「秀叔頭蟲」

「蜜」「孫曼叔暮行汴上見鵲擊蝙蝠以去語於予」

慶暦七（一〇四七）年……「捫蝨得蚤」

慶暦八（一〇四八）年……「十月菊上蜂」

皇祐元（一〇四九）年以降……「八月九日晨興如廁有鴉

啄蛆」（一〇四九）、「守宮」（一〇五〇）、「赤蟻辭

送楊叔武廣南招安」「依韻和達觀師聞蟬」（一〇五

二）、「依韻吳冲卿秋蟲」（一〇五三）、「夏蟲」（一

〇五四）、「初聞蛙」「促織」（一〇五五）、「蠅」「蟬」

「蛙」「蚊」（一〇五六）

傍線を引いた詩に詠じられているシラミ（蝨）、ミミズ（蚯蚓）、コウモリ（蝙蝠）、ノミ（蚤）、ウジ（蛆）、ヤモリ（守宮）は、唐までの詩には主題として描かれた例がほとんど見られない虫である。対して慶暦後期の前後にうたわれているコオロギ（蛩、秋蟲、促織）やセミ（蟬）は、古来しばしば詩に詠じられてきた虫である。さらに、

一 先行研究

慶暦後期に関しては、寛文生氏に言及がある。例えば「梅堯臣論」^{〔2〕}において、梅堯臣には従来の詩にうたわれることのなかった事物をあえて取り上げてうたう傾向があり、それが慶暦五、六年頃より強くなるようだと指摘する。さらに、日常生活の細部を詩に詠み込むという傾向も、この頃に顕著になるという。その代表例として、シラミやミミズをうたう詩が挙げられている。寛氏の言及は大概妥当だと思われる。ただ、「従来見られない」「日常をうたう」という言説はやや曖昧で、そうであるか否かの判断が難しい。そうした詩が現存する梅堯臣の詩の中にどれほどあり、何がどのように詠じられているのか、具体的などころはよくわからない。寛氏以外の論を見ても、従来の詩に見られない事物を詠じる、日常生活を描くといった傾向について代表例を挙げて解説してはいても、やはり梅堯臣の個々の詩に対して具体的な分析を施しているわけではない。そこで本稿では、可能な限り客観的な基準を設けて改めて分析しようと試みた。それにより、寛氏の説を補強あるいは修正し、慶暦後期における詩作の実態を少しでも明白なものにすることができるとはならないかと思う。

二 慶暦後期の概況

具体的な詩について分析する前に、慶暦後期の上限と下限を定めた根拠となる状況と、そこからわかることに

ついで述べておきたい。まず一点目は、詩の量の変化である。朱東潤『梅堯臣詩編年校注』^{〔3〕}に収録された詩篇の数を年ごとに並べると、以下のようになる。

巻数	制作年	詩の数
巻一	一〇三一	58首
巻二	一〇三二	60首
巻三	一〇三三	12首
巻四	一〇三四	51首
巻五	一〇三五	23首
巻六	一〇三六	19首
巻七	一〇三七	39首
巻八	一〇三八	52首
巻九	一〇三九	35首
巻一〇	一〇四〇	42首
巻一一	一〇四一	40首
巻一二	一〇四二	52首
巻一三	一〇四三	35首
巻一四	一〇四四	105首
巻一五	一〇四五	133首
巻一六	一〇四六	152首
巻一七	一〇四七	112首
巻一八	一〇四八	276首
巻一九	一〇四九	48首
		合計778首
		年平均40首
		年平均125首

巻二〇	一〇五〇	63首
巻二一	一〇五一	82首
巻二二	一〇五二	149首
巻二三	一〇五三	176首
巻二四	一〇五四	105首
巻二五	一〇五五	186首
巻二六	一〇五六	220首
巻二七	一〇五七	211首
巻二八	一〇五八	165首
巻二九	一〇五九	177首
巻三〇	一〇六〇	37首
※詩人はこの年の四月に死去		

慶暦三（一〇四三）年以前における詩の収録数は、年間平均四〇首である。一方の慶暦後期は、突出して多い慶暦八（一〇四八）年（二七六首）を除く四年間の年間平均が一二五首であり、それ以前の三倍以上になっている。合計は、慶暦三年以前の十四年間で五一八首、慶暦後期の四年間で七七八首である。詩型や詩ごとの句数を考慮に入れていないが、慶暦後期とそれ以前とでは、収録された詩の数が大幅に変化していることがわかる。

この増加の原因はよくわからない。詩人の生活環境が詩の制作量に影響を与えた可能性のほか、もともと根本的な所で詩集の編纂過程や編年の問題が関係していることも予想される。様々な要因を検討してみる必要があるだ

ろう。とはいえ、少なくともこの時期に多量の詩が作られていたことだけはほぼ間違いない。慶暦後期は詩作活動が盛んな時期であつたと言うことができるだろう。

二点目に、梅堯臣の生活環境の変化を指摘できる。慶暦後期の梅堯臣が、それ以前より詩作を行いやすい環境にいたことは確かであろうである。

慶暦三年以前、梅堯臣は洛陽で過ごした数年間を除き、長年地方官として各地を転々としていた。特に都から遠く離れた南方の都市を中心に滞在することが多かった。略歴は以下の通りである。

天聖九年 （一〇三二）	河南県（河南省洛陽市）主簿となる。錢惟演（九七七一〇三四）、欧陽脩（一〇〇七一〇七二）らと詩を唱和する。
天聖十、 明道元年 （一〇三二）	妻の兄謝絳（九九四一〇三九）が河南府通判となつたため、河陽県（河南省孟州市）主簿に転任する。
明道二年 （一〇三三）	徳興県（江西省徳興市）の令に任ぜられるが、実際には行かず、河陽と洛陽の間を行き来していたという ^{〔4〕} 。十二月に汴京（河南省開封市）へ向かう。
景祐元年	科挙を受験し下第する。八月、汴京を発し

（一〇三四）	建徳県（浙江省建徳市）へ向かう。
景祐二、五、 宝元元年 （一〇三五）	建徳県令として四年間勤務する。任期満了後、汴京に戻る。
宝元二年 （一〇三九）	襄城県（河南省許昌市襄城県）の令となる。
宝元三、 康定元年 （一〇四〇）	秋、襄城にて徴兵令に苦しむ民の姿を目の当たりにし、自らの無力さを歎いて辞職する。鄧州（河南省鄧州市）へ向かい前年に死去した謝絳を弔う。
康定二、 慶暦元年 （一〇四一）	鄧州より汴京へ戻る。秋、湖州（浙江省湖州市）の監税官に任ぜられ、汴京を離れる。
慶暦二 三年 （一〇四二） （一〇四三）	湖州にて三年間勤務する。
一方、慶暦後期は許昌（河南省許昌市）と都汴京が活	

動の中心であった。一ヶ所に一年以上滞在することはなかったが、汴京周辺の地域を巡り、その地の知識人と交流をもった。

慶暦四年 (一〇四四)	春、湖州での任期を終えて汴京へと戻る。 道中、七月七日に妻の謝氏を、ついで次男の十を失う。
慶暦五年 (一〇四五)	六月二十一日、許昌忠武軍節度判官として汴京を発ち許昌へ向かう。
慶暦六年 (一〇四六)	再婚のため一旦汴京に戻る。春に許昌を発ち、先に汝州(河南省汝州市)に立ち寄り、八月、汴京にて妻刁氏を迎える。帰途に潁州(安徽省阜陽市)に立ち寄って元宰相の晏殊(九九一―一〇五五)と面会、年末、許昌に戻る。
慶暦七年 (一〇四七)	秋、任期満了となり許昌を離れる。九月十六日、汴京に到着。
慶暦八年 (一〇四八)	春、汴京にて国子博士となる。夏、刁氏を連れて故郷宣城(安徽省宣城市)へ帰る。秋、晏殊に招かれ陳州(河南省周口市淮陽県)鎮安軍節度判官として赴任する。道中、

期に「従来の詩にあまり詠じられてこなかったもの」をうたうという傾向は、寛文生氏にも指摘がある。そこでまず、虫をうたう詩以外についても同様の傾向が見られるのかどうか調査を行った。

はじめに必要なのが、「従来の詩に見られない」事物に該当するものを特定することである。調査の結果、梅堯臣が主題として描いた事物それぞれについて、次の三つの場合があった。

- 一、唐以前の詩に主題としての用例が一例も見られない
- 二、唐以前の詩に主題としての用例が見られるが少数に留まる
- 三、唐以前の詩に主題としての用例が大量に見られる

主題としての用例がほとんど見られない(右の一と二にあたる)事物でも、描写の一部としての用例が多数見られる場合と、ほとんど見られない場合とがあった。

慶暦五年の詩に「師厚云蝨古未有詩邀予賦之(師厚云ふ、『蝨古より未だ詩有らず』と。予に邀めて之を賦せしむ)」と題するものがある。梅堯臣らはシラミを従来の詩に見られないものと認識していたことがわかる。しかし、描写の一部としてシラミをうたう詩は、隋以前に三首、唐代に三十三首あり、しかも無名な詩人の作ばかりではない。作者の中には李白、杜甫、韓愈、白居易らがあり、李白と韓愈に至っては、シラミの描写を含む詩が

揚州(江蘇省揚州市)で欧陽脩と再会する。
皇祐元(一〇四九)年以降は、服喪のため数年間を故郷宣城で過ごすことになり、それまでとはまた状況が異なる。

慶暦後期には、表に名前が見える人物の他にも、都では甥の謝景初(一〇二〇―一〇八四)や宋敏求(一〇一九―一〇七九)兄弟をはじめとする数人の友人らと、許昌では韓維(一〇一七―一〇九八)ら八兄弟およびその親族らと、盛んな交流を行った。詩集には、彼らと応酬した詩や競作した詩が数多く見られる。対する慶暦三年以前は、特定の人物と複数回に渡ってやり取りしたような形跡がほとんど残されていない。

生活環境、とりわけ交友関係の変化は、梅堯臣の詩作活動に影響を与えた可能性が高い。交流の相手は、詩作の場の共有者もしくは詩の読者となりうる点で、詩作と密接に関わっているからである。慶暦後期に詩人の生活環境が変化したという事実は、この頃に梅堯臣の詩が量的にも質的にも変化したという可能性を補強するものと言えよう。

三 「従来の詩に見られない」事物をうたう詩

先述の通り、虫を主題とする詩に限って言えば、慶暦後期の詩には「従来の詩にあまり詠じられてこなかったもの」をうたうという特徴が確かに認められる。この時

一首に留まらない。すると「未だ詩有らず」とは、シラミを主題として取り上げた詩が存在しない、もしくはその数が圧倒的に少ないとの認識を示すだろう。もう一点補足すると、梅堯臣詩の調査の過程で、ある事物の主題としての用例数と描写の一部としての用例数とは、必ずしも比例しないことがわかった。例えば「鼠」には百を越える用例があり、わびしげな風景を描き出す場合などによく用いられるが、主題としてうたわれた例はごくわずかであった。描写に用いやすいことと主題として取り上げることは別なのである。以上を踏まえ、本稿では主題としてうたわれた用例数の方に判断の基準を置くこととする。

「ほとんどない」という線引きは難しいが、ひとまず唐代までの詩において主題としてうたわれた例が五例以下だった事物を抜き出した。その事物を詠じた梅堯臣詩の題と制作年、具体的な用例数を併せ、年代順に並べると以下の通りになる。

慶暦三年以前		詩題		詠物対象		用例数 (隋唐)		制作年	
尹師魯治第伐樗		樗		0/2		0/1		一〇三一	
錦竹		錦竹		0/1		0/1		一〇三一	
水荭		水荭		0/0		0/0		一〇三一	

尹子漸歸華產茯苓若人形	茯苓	0 / 3	二〇三一
者賦以贈行			
余居御橋南夜聞祆鳥鳴效	祆鳥	0 / 1	一〇三四
昌黎體（1）			
提壺鳥	提壺鳥	0 / 2	一〇三五
青梅	青梅（果実）	0 / 0	一〇三五
九月見梅花	梅花	0 / 2	一〇三五
陶者	陶者	0 / 0	一〇三六
巧婦（2）	巧婦（鳥）	0 / 0	一〇三六
白鷗	白鷗	0 / 2	一〇三七
水輪詠	水輪	0 / 0	一〇三七
禽言四首 子規	禽言	（3）	一〇三七
禽言四首 提壺			一〇三七
禽言四首 山鳥			一〇三七
禽言四首 竹雞			一〇三七
採白朮	白朮	0 / 1	一〇三七
銅坑	銅坑	0 / 0	一〇三七
范饒州坐中客語食河豚魚	河豚魚	0 / 0	一〇三八
詠苜蓿	苜蓿	0 / 1	一〇三八
奉陪覽秀亭拋壻	拋壻	0 / 0	一〇三九
詠蜘蛛	蜘蛛	0 / 4	一〇四〇
冬雷	冬雷	0 / 2	一〇四二

（1）擬体詩のため先行作品が存在するが、他に祆鳥（妖鳥、及び訓狐）を詠じた例は見られないのでここに挙げる。慶暦八年の「擬韓吏部射訓狐」詩も同様である。

（2）巧婦（ミソサザイ）は鷗鴒ともいう。この詩は『詩経』	月暈	0 / 0	一〇四四
鸛風「鷗鴒」にに基づくが、唐までの詩で他にこれを主題とするものが一例も見られなかったためここに挙げる。	月暈	0 / 0	一〇四四
（3）「禽言詩」は、鳥の鳴き声を表す語を詩句の中に入れつつ、それを声としてではなく語の本来の意味で用いて情感などを表現する詩で、梅堯臣から始まるとされる。蘇軾の「五禽言五首」の序に「梅聖俞嘗作『四禽言』。余謫黃州、寓居定惠院。遶舍皆茂林修竹、荒池蒲葦。春夏之交、鳴鳥百族、土人多以其聲之似者名之、遂用聖俞體作『五禽言』。」（梅聖俞嘗て『四禽言』を作る。余、黃州に謫せられ、定惠院に寓居す。舍を遶りて皆茂林修竹、荒池蒲葦なり。春夏之交、鳴鳥百族し、土人多く其の聲の似たる者を以て之を名づれば、遂に聖俞の體を用ひて『五禽言』を作る。）とある。	月暈	0 / 0	一〇四四
慶暦後期	月暈	0 / 0	一〇四四
水次觸體	觸體	0 / 0	一〇四四
同謝師厚宿胥氏書齋聞鼠	鼠	0 / 2	一〇四四
甚患之		0 / 0	一〇四五
師厚云蝨古未有詩邀予賦	蝨		
之			
依韻和中道寶相花	寶相花	0 / 0	一〇四五
擬陶體三首 手問足	手足目	（1）	一〇四五
擬陶體三首 足答手			一〇四五
擬陶體三首 目釋			一〇四五

將行與蔡仲謀飲分席上果	桃（果実）	0 / 0	一〇四五
得桃（2）			
日蝕	日蝕	0 / 0	一〇四五
和通判太博雞冠花十韻	雞冠花	0 / 1	一〇四五
蚯蚓	蚯蚓	0 / 1	一〇四五
和王仲儀詠癭二十韻（3）	癭	0 / 0	一〇四六
秀叔頭蝨	蝨	0 / 0	一〇四六
深夏忽見柰樹上猶存一顆	柰實	2 / 0	一〇四六
實			
麥門冬內子吳中手植甚繁	麥門冬	0 / 0	一〇四六
鬱罷官移之而歸不幸內子			
道且亡而茲草亦屢枯今所			
存三之一耳遂感而賦云			
孫曼叔暮行汴上見鵲擊蝙蝠以去語於予	蝙蝠	0 / 3	一〇四六
取■（■＝右虫左咸）	■	0 / 0	一〇四六
舟中行自采枸杞子	枸杞子	0 / 4	一〇四六
王仲儀寄鬪茶（4）	鬪茶	0 / 0	一〇四六
鬪鶴鶉孫曼叔邀作	鶴鶉	0 / 0	一〇四六
韓持國邀賦鬪山鵲	山鵲	0 / 3	一〇四六
與仲文子華陪觀新水磴	水磴	0 / 0	一〇四六
玉汝遺橄欖（5）	橄欖	0 / 0	一〇四七
詠雙杏子其核亦然	杏子（果実）	0 / 0	一〇四七
和王仲儀楸花十二韻	楸（花）	0 / 0	一〇四七
記春水多紅雀傳云自新羅	紅雀	0 / 0	一〇四七

而至道損得之請余賦			
捫蝨得蚤	蝨	0 / 0	一〇四七
和王仲儀二首 凌霄花	凌霄花	0 / 0	一〇四七
詠稗	稗	0 / 1	一〇四七
詠象韓子華邀賦	象	0 / 1	一〇四七
食齋	齋	0 / 1	一〇四七
夜飲席上賦松子	松子	0 / 0	一〇四七
送鄭宰王殿丞（6）	結	1 / 3	一〇四七
泥	泥	0 / 0	一〇四八
橐駝	橐駝	0 / 3	一〇四八
和石昌言學士官舍十題	薏苡	0 / 0	一〇四八
薏苡			
和石昌言學士官舍十題	水紅	0 / 0	一〇四八
水紅			
楚童（7）	楚童	0 / 0	一〇四八
慈姥山石崖上竹鞭	竹鞭	0 / 1	一〇四八
寄麥門冬於符公院	麥門冬	0 / 0	一〇四八
牛背雙鸚鵡	鸚鵡	1 / 2	一〇四八
苻	苻	0 / 2	一〇四八
田家屋上壺	壺	0 / 3	一〇四八
采杞	杞	0 / 4	一〇四八
水次薜花	薜（花）	0 / 2	一〇四八
牽船人	牽船人	0 / 1	一〇四八
擬韓吏部射訓狐	訓狐（祆鳥）	0 / 1	一〇四八
糟淮鮓（8）	鮓	0 / 0	一〇四八

(1) 擬体詩であるが、「形・影・神」を「手・足・目」に換えてある。体の一部を詠じる詩について、少なくとも「手」を調べた限り、「招手令」という酒令の詩と、「詠手」と題して美女の手をうたった詩三、四首が見られるのみであった。あまり主題とならないものの一つとみなせると考え、ここに挙げる。

(2) 桃を詠じた詩は大量に見られ、その花や木をうたう詩の一部に果実を描写するものが数例あったが、果実そのものを詠じる作は見られなかったため、ここに挙げる。

(3) この詩は王安石の集にも収められているが、朱東潤氏の考証に依れば、王仲儀（王素）の汝州赴任期間中、王安石は汴京におり、接触はなかったという。

(4) 茶に関する詩は大量に見られるが、闘茶については唐・馮贄の『雲仙雜記』に「建人謂闘茶為茗戰。（建人 闘茶を謂ひて茗戰と為す。）」とあるのを除けば、詩文ともに宋代以降のものにしか記載が見られない。

(5) 贈答に関する詩だが、橄欖の描写が詩の大半を占めるためここに挙げる。

(6) 送別詩だが、鮎の描写が詩の大半を占めるためここに挙げる。

(7) 類似のものに野童や牧童を詠じる詩があり、牧童は五首以上にうたわれていた。ただし牧童の例のみに偏っていたため、先行例とはみなさなかった。

(8) 梅堯臣には他にも鮎料理の贈答に関する詩が見られるが、

送り主に関する情報や感謝の意がほとんどで品物の描写はごく一部であったため、ここには挙げない。

ここでまず指摘できるのは、慶暦三年以前の詩にも、唐代までに主題となった例が一つもない事物が詠じられていることである。中でも河豚をうたう詩は、欧陽脩の絶賛を受け、後世の詩話にもたびたび取り上げられてきた。先行例のない事物をうたいたい、かつ詩人の代表作ともみなしうる詩だが、作られたのは慶暦後期の五年以上前である。また、一〇三一年の作「錦竹」も、唐以前の先行作品が皆無と言つていい詠物詩である。先行例を一例としたのは、杜甫に「綿竹」という植物をうたう詩が見られ、字の混同が疑われるためである。しかし、描写の共通点は少なく、同一の植物ではない可能性も高い。同じ物であったとしても、杜甫の詩を意識した作ではないようなので、先行作品は実質ないと言えるだろう。この詩は、現存する詩の中で最初期のものである。慶暦後期より前の、かなり早い時期から、従来の詩にあまり主題とされなかった事物をうたう詩が作られてきたことがわかる。この傾向は慶暦後期ごろに突然発生したわけではないのである。

それでは、慶暦後期にはこうした詩の量が増加したのだろうか。従来の詩にあまり見られない事物を詠じた詩篇の数を慶暦後期とそれ以前とで比較すると、次のようになっている。

慶暦三年以前 二十三首 / 全体数…五一八首
慶暦後期 五十首 / 全体数…七七八首

該当する詩が慶暦後期に倍増しているように見えるが、これは全体数の増加とほぼ比例するだけで、全体に対する割合は慶暦三年以前が四パーセント強、慶暦後期が六パーセント強で、増加の幅はごくわずかである。この差を有意とみなすのは難しい。従来の詩に主題とされてこなかった事物を詠じることについて、慶暦後期に量的な変化があるとは言えない。つまり、従来の詩に見られない事物をうたう詩が慶暦後期に集中するという現象は、虫をうたう詩には当てはまるが、梅堯臣詩全体に共通するものではなかったのである。

四 日常生活の中に描き出すという詠じ方

確かに慶暦後期には、従来あまりうたわれてこなかった事物をうたう詩の量的な増加は認められない。しかし、前節の表に挙げた詩について検討すると、慶暦後期とそれ以前とは印象がどこか異なるように思う。本稿の冒頭で虫をうたう詩における慶暦後期の特異性を述べたとき、従来の詩に見られない虫か否かの他にも、虫の描き方や、作中での役割という点で、前後の時期と差が見られることを指摘した。それは例えば、身の回りにいる虫の姿をありのままに描き出すか、虫を社会に生きるヒト

の比喩として描き出すかといった違いであった。そこで、慶暦後期とそれ以前との間で、対象の描き方が異なっているのではないかとこの点について考えてみたい。

前節の表を見ると、慶暦後期の詩には、梅堯臣の個人的な生活空間の中に事物を描いているものが目につく。日常生活を描くことがこの時期に顕著になる点も、笈文生氏が指摘するところである。「日常生活」は、慶暦後期の詩作活動を考える上で鍵となる一つの切り口と言える。

ところが「日常生活」という語もまた非常に曖昧である。例えば、シラミは日常の中の卑近な存在という印象があるが、出征兵士の鎧に湧くシラミなどは、兵士自身にとっては日常であっても、詩人を含め一般の人々には出征兵士となること自体が異常であるため、日常生活の一コマとは言えない。そこで、先行研究においてどのような例が挙げられているのかを参考にしたい。笈文生氏は、「南隣蕭寺丞夜訪別」（隣人との別れをうたう詩）、「同謝師厚宿胥氏書齋聞鼠甚患之」（夜中に暴れ回る鼠をうたう詩）のほか、「正月十五夜出廻」（新婚）、「戊子正月二十六日夜夢」など亡き妻を悼む詩七首ほどを、家族への愛情をうたった詩の例として挙げ、その愛情は家畜にも及んだとして「傷白雞」「祭猫」（飼っていたニワトリ・猫の死を悼む詩）を挙げる。また、吉川幸次郎氏の『宋詩概説』にも、慶暦後期と直接の関連はないが梅堯臣の日常生活描写について触れた箇所がある。笈氏と重複す

るものを除くと、「秀叔頭蝨」（息子の頭のシラミをうたう詩）と、「依韻和原甫月夜獨酌」詩の中の貧乏揺すりを描写した句を挙げている。さらに続けて、「汴京の遊園地であつた金明池についての詩、浅草の観音のように露店の多い相国寺へ、劉敞、江休復とともに、呉道子の画、楊惠之の塑像を見に行った詩、その老柏の下の露店の翁から墨を買った詩、梅の花を売りあるくものを見ての詩、蕒、蓼など野菜売りの詩（以下略）」など、家庭の外にまで範囲を広げ、日常を描いた例を列挙する^{〔5〕}。吉川氏は、家庭の内と外とを問わず、その主題を見つめる詩人の観察の細やかさに特に注意を置いているようである。寛・吉川両氏の研究を参考にすると、まず家庭内のこと、家族のことを描き出したものは、日常生活の一部分である。次に、家庭の外をうたう詩であっても、詩人自身が直接その物や事柄に関与している場合は日常生活の一部を描くと言えるだろう。例えば鼠の物音を聞いたのは詩人の実体験であるし、金明池に遊んだのは汴京居住中で、こちらも詩人の活動記録である。「蕒、蓼など野菜売りの詩」も、描写の中に詩人が直接売り声を聞いたことが窺える表現があつた。そこで、ひとまず「題もしくは句の中に梅堯臣自身またはその家族の姿が描かれている詩」を、日常生活をうたう詩であると考えてみたい。

この基準によつて先ほど表に挙げた詩（従来の詩であまり主題とされてこなかった事物をうたう詩）を分類すると、慶暦後期は二十三首、それ以前は六首が日常生活

をうたうものに該当した。この中には、主題となる事物の描写とは関わりのない部分で日常が描かれているものが含まれる。例えば、「將行與蔡仲謀飲分席上果得桃（將に行かんとして蔡仲謀と飲み、席上の果を分けて桃を得）」は、題の中で詩作の場に言及しており、その場にある桃から主題を得たことが示される。しかし、詩に描き出されるのは桃全般についてであつて、詩人の眼前にあるそれと限定するような描写はない。この例のように、主題となつてゐる事物が詩人と共に存在するものとして描かれていないような場合は、ひとまず対象から除外する。その上で、日常生活とともに事物を描写している詩を表にまとめると次のようになる。「日常生活」と判断する根拠となつた表現も併せて示す。

慶暦三年以前			
詩題	根拠となる表現	制作年	
余居御橋南夜聞祇鳥鳴 效昌黎體	詩題、「都城夜半陰雲黑、忽聞轉轂聲咿咿」「嘗憶楚鄉有祇鳥」「我問楚俗何苦爾」	一〇三四	
九月見梅花 奉陪覽秀亭拋堦	詩題、「今日樽前勝」	一〇三五	
冬雷	詩題、「聊爲飛礫戲」（他ほぼ全篇）	一〇三九	
	「我今來江南」「嘗觀古祠畫」	一〇四二	

作品数は、慶暦三年以前が四首、慶暦後期が十一首である。従来の詩にあまり見られない事物を詠じた詩全体は、慶暦三年以前が二十三首、慶暦後期が五十首であつたので、比率としては十七パーセントから二十二パーセントと、わずかながら増加が見られる。とはいえ、事物を日常生活の中に描き出すという点についても、量的な変化はあまり顕著ではない。

数量による単純な比較では両時期の差異が見えてこない。そこで、詩の内容や表現について、一首一首確認していきたい。対象は右の表の詩、すなわち従来の詩にほとんどどうたわれてこなかった事物を主題とし、なおかつ日常生活の一部としてその事物を描き出す詩とする。

五 詩の内容の比較

（一）自身とともに対象を描き出す詩

まず、詩人本人とともに事物を描き出す作について見てみる。慶暦三年以前の四首は、全てこれに該当する。一〇三五年の作「九月見梅花（九月に梅花を見る）」は、全八句中の第五・六句に「今日樽前勝、其如秋鬢華。（今日樽前の勝、其れ秋鬢の華の如し。）」とあり、九月に咲いた梅が、詩人の目の前に珍しい事物として描き出されている。もともと、花と花を見る自分とをうたうこと自体は、古くよりしばしば行われてきた。梅堯臣がこの詩で生活の一場面を描いたのは、伝統に則った表現に過

慶暦後期

月量	「明日挂帆歸」	一〇四四
同謝師厚宿胥氏書齋聞鼠甚患之	詩題、「驚聒夢寐輟」	一〇四四
蚯蚓	「聒亂我不寐、每夜但欲明」	一〇四五
秀叔頭蝨	詩題、「吾子久失恃」（他ほぼ全篇）	一〇四六
深夏忽見柰樹上猶存一顆實	詩題、「行樂偶散步、倚杖聊縱窺」	一〇四六
麥門冬內子吳中手植甚繁鬱罷官移之而歸不幸移植堂堦前「佳人路內子道且亡而茲草亦屢中死、此草未忍捐」與枯今所存三之一耳遂感我日憔悴」（他ほぼ全篇）		
舟中行自采杓杞子	詩題、「繫舟聊以撥」	一〇四六
與仲文子華陪觀新水碓	詩題、「人悟雪中歸」	一〇四六
捫蝨得蚤	詩題、「茲日頗所懷、捫蝨反得蚤」	一〇四七
食齋	「適見採齋人、自出國門南」	一〇四七
寄麥門冬於符公院	「佳人種碧草」「于今五六年、與我道路長」（他ほぼ全篇）	一〇四八

ぎない。

次に、「余居御橋南夜聞祇鳥鳴效昌黎體」（余、御橋の南に居り、夜祇鳥の鳴くを聞く。昌黎の體に效ふ）（一〇三四年）という詩は、題からわかるように韓愈の詩を模倣した作であり、その日常描写も韓愈の作を引き継ぐ。それぞれの冒頭六句を引く。

「余居御橋南夜聞祇鳥鳴效昌黎體」全十八句

1 都城夜半陰雲黑 都城夜半陰雲黒く
2 忽聞轉轂聲咿呦 忽ち聞く轉轂の聲咿呦たるを
3 嘗憶楚鄉有祇鳥 嘗て憶ふ楚郷に祇鳥有りて
4 一身九首如贅疣 一身九首贅疣の如きなるを
5 或時月暗過閭里 或る時月暗くして閭里を過ぎ
6 緩音低語若有求 緩音低語求むる有るが若し

韓愈「射訓狐（訓狐を射る）」全二十二句

1 有鳥夜飛名訓狐 鳥の夜飛ぶ有り訓狐と名づく
2 矜凶挾狡誇自呼 凶を矜り狡を挾み誇りて自ら呼ぶ
3 乘時陰黑止我屋 時の陰黒なるに乗じて我が屋に止まり
4 聲勢慷慨非常粗 聲勢慷慨にして常に非ず粗し
5 安然大喚誰畏忌 安然として大喚し誰をか畏忌せん
6 造作百怪非無須 百怪を造作して須むる無きに非ず

「奉陪覽秀亭抛壻（覽秀亭の抛壻に奉陪す）」（一〇三九年）

1 聊爲飛礮戲 聊か飛礮の戲を爲せば
2 愈切愈紛如 愈いよ切にして愈いよ紛如たり
3 自是取勢闊 自らは是れ勢を取ることを闊ければなり
4 非關用意疎 意を用ふること疎きに關はるに非ず
5 悞驚花鳥起 悞まりては花鳥を驚かして起たせ
6 亂破錦苔初 亂れては錦苔の初なるを破る
7 童指拾將禿 童は指す拾ふものの將に禿げんとするを
8 多慙賈勇餘 多く慙づ勇餘を賈るを

「抛壻」は宋代、寒食の日の風習であり、標的に瓦礫を投げる遊びだったらしい。ほぼ全篇が詩人の行為・動作の描写で、第一・二句に石投げ遊びに参加してみたということと、切迫すればするほど狙いが定まらなくなっていくことを述べ、第三・四句では、うまく投げられないのは自分が利益を求める欲に乏しいだけなのだと弁解する。第五・六句は遊びが白熱する様子をさらに細かく描き、投げ損じた石が飛んでいくさまを写し取る。末尾の二句は、禿頭を子どもたちに笑われる自らの姿を、諧謔と共に描き出す。こうした具体的描写が、他三首とまず異なる。さらに、うたわれる対象が詩中で担う役割も違う。この詩の主題「抛壻」に特別な意味をもたせようとすれば、例えば古の石投げ遊び「擊壤」の故事

梅堯臣の作が彼の日常生活を描いたことは、詩題の「余」という一人称代名詞からわかる。「御橋」は、汴京の宮城の堀にかかる橋で、同年の作「月夜與兄公度納涼閑行至御橋」詩に「家近御橋頭、因爲橋畔遊。（家は御橋の頭に近く、因りて橋畔の遊を爲す）」とあるように、自宅が近かった。第二句には「忽聞」とあり、日常生活の中で突然発生した出来事とされている。韓愈の詩は「訓狐」という怪鳥をうたうもので、第三句に「我屋」とある通り、こちらも場面は詩人の住まいである。他にも、梅詩第一句の「陰雲黑」と韓詩第三句の「陰黑」という語、怪鳥の形の形容（梅詩第六句と韓詩第五・六句）など、描写に複数の類似点が見られる。

慶暦三年以前のもう一作「冬雷」（一〇四二年）は、江南に赴任した梅堯臣がそこで経験した冬の雷をうたったものである。直接模倣した先行作品はないようだが、この詩は右に挙げた怪鳥をうたう二首とよく似た雰囲気をもつ。長編の古詩である点が共通し、内容面では異常な事物を核に、一つの寓話が展開される点が似ている。いずれの詩も、社会・政治批判の意図を読み取れる言葉で作品を結ぶ。「冬雷」詩も、自分自身の日常生活が一つの寓話へと転化するという点で、先行例が存在すると言えよう。

慶暦三年以前の残る一首は、他三首とは詠じ方がやや異なっている。

を用いて太平の世を賛美する寓話を構成してもよかっただろう⁷⁾。しかしここに描き出されるのは梅堯臣が体験したままの滑稽な遊戲そのものであり、前掲の詩の怪鳥や冬の雷が悪の象徴という役割を担ったのとは大きく異なる。

ただし、一点指摘しておきたいのは、「抛壻」が年中行事の一部であるということだ。節句の宴は、詩を作る格好の機会である。『唐詩類苑』も、節句をうたう詩を多数収録しており、「寒食」だけでも約八十首に上る。こうした特別な一日の社交の場は、確かに詩人の生活の一部ではあるが、描かれるべくして描かれたとも言えるだろう。

以上のように、慶暦三年以前の日常描写は、伝統に沿うもの、先行する作品に基づくものであるか、日常の中でもやや特別な場面をうたうものであった。

慶暦後期にも、描写することが伝統として根付いた日常のある場面を描いた詩や、年中行事などの特別な日常をうたった詩は複数見られる。しかしその一方で、この時期以前にはほとんど見られなかったような詩も作られるようになる。

「同謝師厚宿胥氏書齋聞鼠甚患之（謝師厚と同一胥氏の書齋に宿り、鼠を聞きて甚だ之を患ふ）」（慶暦四年）

1 燈青人已眠 燈青く人已に眠り
2 饑鼠稍出穴 饑鼠稍く穴より出づ

3 掀翻盤盂響 掀^あげ翻^かへして盤盂響き
4 驚聒夢寐輟 驚^{おど}き聒^{かく}しくして夢寐輟^やむ
5 唯愁几硯撲 唯^{ただ}だ愁^{さふ}ふ几硯^この撲^うたるるを
6 又恐架書齧 又^{また}た恐^{おそ}る 架書^かの齧^かまるるを
7 癡兒效貓鳴 癡^{ねこ}兒^わ猫^{ねこ}の鳴^なくに效^ならふも
8 此計誠已拙 此^この計^{はなし}誠^{まこと}に已^なだ拙^{つた}し

甥の謝景初とともにその岳父である胥偃の書齋に泊まつた時の作である。この詩における日常の描き方は、伝統や先行作品に基づかない。眠れぬ夜というものは、古来詩にうたわれてきたし、書齋で過ぐす夜を詠じた詩も梅堯臣以前に何首も存在する。しかし、伝統的な夜の描写は旅愁や閨怨を背景とすることが多いのに対し、この詩も愁いをうたつてはいるが、愁いの契機・対象は大きく異なる。夜の書齋という物静かな空間が伝統的なイメージを踏襲する中、鼠の騒がしさがそれを破り、全体としては対比が作り出す諧謔に主眼があるように思える。

また、ここに描かれる鼠は、書齋の主の貧しさを暗示したり、『詩経』魏風「碩鼠」のように横暴な権力者を象徴したりすることがない。ヒトと鼠とが音による応酬を繰り広げており、生活の中に普通に存在する鼠がそのままの姿で描き出されている。

慶曆五年の作「蚯蚓」は、明らかに特別ではない日常を描く。第九・十句で、「聒亂我不寐、每夕但欲明。（聒亂我寐ぬられず、毎夕但だ明けんことを欲す。）」と、

姿勢こそが、この時期の梅堯臣の特徴なのではないだろうか。

(二) 家族と共に対象を描き出す詩

次に、日常描写のある詩のうち、詩人の家族と共に事物を描き出しているものについて見ていきたい。慶曆三年以前には、そもそも家族の描写を含む詩自体が少なく、伝統的に詩にうたわれてこなかった事物を、家族と共に詠じた詩は一首も見られない。この時期の全ての詩の中から家族に言及のあるものを取り出すと、七首ほどであった^①。ところがそれらも、家族の描写自体が少ないばかりでなく、描写そのものは伝統的によく見られるものであったり、誰にでも当てはまる具体性のないものであったりした。例えば一〇三五年の作「往東流江口寄内（東流の江口に往きて内に寄す）」と「代内答（内に代わりて答ふ）」は、夫婦間の手紙としての詩であるが、「寄内」「寄妻」と題する詩は唐の李白らにもすでに見える。詩中の表現はつがいの鳥やはぐれ馬を描いて離別を悲しむもので、古詩や樂府詩と類似している。自身の妻についても、具体性・個別性のない描写しかしていない。また、同じく一〇三五年の作「除夕與家人飲（除夕家人と飲む）」と、一〇四二年の作「歲日旅泊家人相與爲壽（歲日旅泊して家人と相與に壽を爲す）」は、日常生活の中でも年末年始という節目の一日をうたつたものである。さらに、前者は詩の中に家族の描写らしきものはなく、

ミミズの鳴き声に苦しみめられる毎夜を歎いている^②。梅堯臣は、ミミズの存在も含めて繰り返される日々の日常そのものを描いたのである。

次の詩も、日常生活の中のあるふれた存在について詠じている。

「深夏忽見柰樹上猶存一顆實（深夏 忽ち柰樹の上に猶ほ一顆の實を存するを見る）」（慶曆六年）

1 纍纍後堂奈 纍^な纍^なたる後堂^{ごどう}の奈
2 落盡風雨枝 風雨^{ふうう}の枝より落ち盡くす
3 行樂偶散步 行樂^{ぎやうらく}偶^ぐたま散歩^{さんぷ}し
4 倚杖聊縱窺 杖^{よう}に倚りて聊^{りやう}か縱^{ほう}に窺^くふ
5 林葉隱孤實 林葉^{りんえつ}孤實^{こじつ}を隠し
6 山鳥曾未知 山鳥^{さんてう}曾^{そう}て未だ知らず
7 物亦以晦存 物^{もの}も亦^{また}晦^みを以て存す
8 悟茲身世爲 茲^{こゝ}を悟りて身世^{せうし}を爲めん

描かれるのは、散策の途中で偶然に得られた発見である。第三・四句の「偶」「聊」の語から、特別でないところの何気ない散策だったとわかる。そこで見つけた木の実も、いつどこにでも存在する可能性があるものだろう。その木の実は山鳥さえ気付かないちっぽけなものであり、だからこそ食べられずに詩人に発見されることになったのである。こうしたちっぽけなものを日常生活の中で発見できる目、あるいはそれを詩にしようとする

後者は妻への言及が全二十句中で「孺人相慶拜、共坐列杯盤。（孺人相慶拜し、共坐して杯盤を列ぬ。）」という二句しかない。

慶曆後期は、家族に言及する詩自体が増え、描写に詳細で具体的なものが見られるようになる。そうした中で、従来の詩に詠じられてこなかった事物を家族と共にあるものとして描き出す詩も現れる。該当する詩は三首ある。

「秀叔頭蝨（秀叔が頭の蝨）」（慶曆六年）

1 吾兒久失恃 吾^わが兒^こ久^{ひさ}しく恃^{たの}み^みを失^なひ
2 髮括仍少櫛 髮^{かみ}は括^{くく}りて仍^なく櫛^{くし}る^{こと}少^{すく}なし
3 曾誰具湯沐 曾^{さう}て誰^{たれ}か湯沐^{とうもく}を具^{そな}へん
4 正爾多蟻蝨 正^{ただ}に爾^{なん}く蟻蝨^{ぎし}多^{おほ}し
5 變黑居其元 黑^{くろ}に變^かじて其^{その}元^{もと}に居^ゐるは
6 懷絮宅非吉 懷^{おほ}絮^ほは宅^{たく}を^をるに吉^{きち}に非^{あら}ざればなり
7 蒸如蟻亂緣 蒸^{あつ}きこと蟻^{あひこ}の亂^{みだ}れ緣^へるが如^{ごと}く
8 聚若蠶初出 聚^{あつ}まること蠶^{かいこ}の初^{はじ}めて出^でづるが若^{ごと}し
9 鬢搔劇蓬葆 鬢^{かみ}は搔^かげば蓬^{ほう}の葆^ほるより劇^{はげ}しく
10 何暇嗜梨栗 何^{なん}ぞ梨栗^{りり}を嗜^{あそ}むに暇^{いとま}あらん
11 剪除誠未難 剪^きり除^{はら}くは誠^{まこと}に未^なだ難^{がた}からざれども
12 所惡累形質 惡^{にく}む所^{ところ}は形質^{かたち}を累^{おも}はすにあり

第一句の「失恃」は、二年前の慶曆四年に梅堯臣の妻謝氏が死去したこと。詩題にあるように息子秀叔が主要な描写対象であるため、表現が個別的・具体的になって

いる。黒い蟻や生まれたての蚕が群がるさまを比喻に用いて、息子の頭にいるシラミが通常のシラミとは異なつて黒色であることが強調される。まさに目の前に存在するそれとして、対象が描き出されているのである。また、この詩は随所に典故や対句などの技巧が凝らしてある。例えば第三句は、『淮南子』説林訓に「湯沐具而蟻蝨相弔、大厦成而燕雀相賀。（湯沐具はりて蟻蝨相弔ひ、大厦成りて燕雀相賀す。）」とあるのに拠つて、我が子は湯浴みもさせてもらえないためにシラミが湧いているのだといい、第十句では陶淵明「責子詩」の「通子垂九齡、但覓梨與栗。（通子は九齡に垂とするも、但だ梨と栗とを覓むるのみ。）」という句に基づいて、シラミがかゆくて栗や梨を求めることすらできない息子のさまを憐れんでいる。目の前にある状況を言葉でいかに写しとるかを樂しみながら、対象をありのままに描き出すことに成功した作だと言える。

残る二首は、妻の形見の麦門冬という薬草についての詩である。「麥門冬内子吳中手植甚繁鬱罷官移之而歸不幸内子道且亡而茲草亦屢枯今所存三之一耳遂感而賦云（麥門冬内子吳中にて手づから植え、甚だ繁鬱たり。官を罷むるに之を移して歸るも、不幸にして内子道にて且つ亡し、而して茲の草も亦屢しば枯れ、今存する所三の一のみなれば、遂に感じて賦すと云ふ）」（慶暦六年）と題する詩全十四句中の第九、十一句に、「與我日憔悴、根不通下泉。勤勤爲澆沃、稍見萌穎鮮。（我と與に日に憔悴し、

根は下泉に通らず。勤勤として爲に澆沃し、稍く萌穎の鮮しきを見る。）」とある。草と詩人が徐々に憔悴していくという描写や、水やりを続ける詩人の姿からは、それが継続性のある日々の暮らしであることが読み取れる。二年後の作「寄麥門冬於符公院（麥門冬を符公院に寄す）」にも、「陸行載以車、水行載以航、于今五六年、與我道路長。（陸行しては載するに車を以てし、水行しては載するに航を以てし、今に于いて五六年、我と與に道路長し。）」など、長く生活を共にしたことが語られる。

これら三首に描かれた日常は、妻がいないという意味では特別な場面である。しかし、その日々は慶暦四年の夏以来、継続し続けている。年末年始などの節目ではなく、昨日も今日も変化することのない生活の中で、そこに存在し続けている事物をうたうというのは、やはり以前までの詩とは異なっている。その描き方は、対象を一般化したり、何かの象徴としたりするのではなく、現実に即して具体的である。

おわりに

慶暦後期の詩がそれ以前と異なる点は、次のようにまとめることができるだろう。慶暦後期には、従来の詩にあまり詠じられてこなかった事物を、日常生活の中に常に存在するものとして描き出すようになる。言い換えれば、日常生活の中にいつでも存在しているからこそ、詩の主題として取り上げられることのなかったような事物

をあえてうたうようになるということである。しかも、対象とする事物を何かの比喻や象徴とするわけではなく、少なくともその意図を前面に押し出すことなく、目の前に存在するそれとして、ありのままに描き出す。このような描き方が、慶暦後期の詩に特徴的と言えそうである。ただし、慶暦三年以前の詩にも、類似した意図の下に作られた詩が皆無というわけではない。そのうえ、慶暦三年以前に見られた詠じ方、例えば中国古典詩の伝統に則った描写などは、慶暦後期でも引き続き行われている。つまり、慶暦後期は、もともと作風から全く別の作風に移行したのではなく、以前は稀であった詠じ方が、徐々に前面に押し出されるようになった時期なのである。両時期の間に見られる差異は、量的なものではなく、事物の描き方による質的なものである。そのため、詩集に収録された作品数の大幅な増加とは別に、確かに存在する違いだと言える。以上に、梅堯臣の詩が慶暦後期において変化しているという事実を確認した。梅堯臣の詩作活動について考察する際、慶暦後期が注目するに値する転換期の一つであることを指摘して、本稿の結論としたい。

この変化のもつ意味は、慶暦後期以後に見られるであろう梅堯臣詩の作風次第で大きく変わってくると思われる。笈文生氏は、日常を詠じる傾向、従来の詩に見られないものをうたう傾向が、慶暦以降ともに強化、徹底されていくと述べており、その通りであれば、慶暦後期は

梅堯臣の詩風の少なくとも一部分が形成された、出発点ということになる。しかし、後の時期の詩作が、慶暦後期とはまた別の方向に転換している可能性も考えられる。なぜなら慶暦以降には、詩の数、詩人の生活環境、詩から受ける印象など、いくらかの点で慶暦後期との間に差異が見出せるからである。特に気になるのが、晩年汴京での生活が主となって、対人関係の中で作られた詩が目立つようになる反面、古来うたわれてこなかった事物を詠じる詩の存在感が相対的に薄くなる点である。慶暦以降に新たな転換が起こっていた場合、それがどういう方向に向かったのかによって、慶暦後期の意味は異なるはずである。こうした問題について、今後追求していきたい。

注

〔1〕宋・李昉等撰『太平御覽』『虫部』に収められているかどうかを虫と判断する基準とする。

〔2〕『東方学報』三十六、京都大学人文科学研究所、一九六四年。また同氏の『中国詩人選集二集 梅堯臣』（岩波書店、一九六二年）のほか、時期的な言及はないが吉川幸次郎『中国詩人選集二集 宋詩概説』（岩波書店、一九六二年）などにもこれらの傾向について指摘がある。

〔3〕上海古籍出版社、一九八〇年。朱東潤氏の編年の方法は、

①詩の記述や年月を特定できる内容から制作年を割り出す。

②唱和相手（主に欧陽脩）の詩の制作年代から制作年代を割

り出す。③特定できる詩の間にある詩を同年と推定する。というものである。幾らかの問題点（例えば版本によって並びに差異があるため、③による詩の排列に混乱がないとは保証できないなど）は、氏自ら指摘されている通りである。編年及び詩集成立に関する諸問題は今後改めて検証することとし、本論文においては全面的に朱東潤氏の編年に従う。また詩を分析する際、特に重視する例に関しては、四部叢刊本での収録位置も確認した。

〔4〕朱東潤氏の見解であり、笈文生氏は実際に赴任しているとする。本稿は朱氏の編年に基づいているため、ひとまず朱氏に従う。

〔5〕『中国詩人選集二集 梅堯臣』九〇十一頁。

〔6〕『中国詩人選集二集 宋詩概説』一〇〇、一〇一頁。

〔7〕「撃壤」の故事は、石投げをして遊ぶ老人が堯帝の徳のありがために気付かぬまま太平を謳歌するという記載に基づくものである。南朝宋・謝靈運「初去郡」『文選』卷二十六に「獲我撃壤聲」という句が見られ、李善注に引く晋・周処『風土記』に、「撃壤者、以木作之、前廣後銳、長四尺三寸、其形如履。將戲、先側一壤於地、遙於三四十步、以手中壤擊之、中者爲上部。（撃壤は、木を以て之を作り、前は廣く後は鋭く、長さ四尺三寸、其の形は履の如し。將に戯れんとして、先づ一を壤を地に側て、遙かなること三四十歩に於いて、手中の壤を以て之を撃ち、中つる者を上部と爲す。）」といい、続けて引く漢・王充『論衡』須頌篇（感虚篇にもほぼ同様の記載あり）に「或年五十撃壤於塗。或曰、『大哉、

堯之徳也』。撃壤者曰、『吾日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、堯何等力』。（年五十にして塗に壤を撃つものなり。或ひと曰く、『大なるかな、堯の徳や』と。壤を撃つ者曰く、『吾日出でて作り、日入りて息め、井を鑿ちて飲み、田を耕して食らふ、堯何等の力あらん』と。』とある。ただし、「撃壤」には二義があり、堯帝の故事は石の樂器を打つという意味で石投げの遊戲ではないとする説もある。

〔8〕蚯蚓が鳴くことについて、古くは晋・崔豹『古今注』魚虫に「蚯蚓、一名蜿蟺、一名曲蟺、善長吟於地中、江東謂之歌女、或曰吟砌。（蚯蚓は、一名蜿蟺、一名曲蟺、善く地中に於いて長吟し、江東之を歌女と謂ひ、或いは吟砌と曰ふ。）」と記載がある。ただしこれは誤りで、鳴くのは蜷蟪（オケラ。諸説があり、あるいは蛙といい、あるいは「蜷」はケラ、「蟪」は蛙を指すという）であるが、一所にいるために蚯蚓も鳴くとみなされたのである。宋・俞琰『席上腐談』卷上に指摘が見られる。

〔9〕別居している両親や兄弟は含めない。

〔附記〕本稿は、中国中世文学会平成二十八年年度研究大会（平成二十八年十月二十九日、於広島大学東千田キャンパス）における口頭発表をもとにまとめたものである。その席上、貴重なご教示・ご指導をいただいた諸先生方に、ここに深く感謝いたします。